

## 社会学部論叢の創刊によせて

学長 佐伯 弘 治

1970年前後の大学紛争の頃、これからの大学には制度的に二種類の教員をおくべきではないか、という意見があった。即ち、研究教員と教育教員である。勿論、この意見に、それほどの説得性があったわけではないが、少なくとも、当時も、今も、わが国の大学が抱えている問題点の一つを鋭く衝いたものではあった。確かに旧制（大学令）大学時代は、大学も、社会も、教育と研究は殆ど表裏一体をなすものとして受けとめていたので、大学教授は自らの大学における職務は専ら研究であり、教育は研究活動の一端、いわば付け足し程度のものでしか考えていなかった。また、それでもどこからも文句は出なかったし、これといった支障もなかった。しかし、今の大学ではそうはいかない。学生や世間の大学に対する教育的役割への期待は思いのほか大きく、教員の教育業務の負荷率はしだいに高まってきている。いうならば大学の量的拡大が、質的な変容を招いたということであろうが、われわれとしては、これはこれとしてしっかりと受けとめて行かなければならない。

一方、大学教員の研究上の責務は昔日と何ら異るところはない。従って、今日の大学教員の仕事量は明らかに増大しており、研究と教育の両立という難題と真っ向から向き合っているということになる。

ところで、この度、わが社会学部の紀要、「社会学部論叢」の創刊号が出ることになった。学部自体としては、新設学部として教育上いろいろ新機軸を打ち出そうと試みられているようであるから、教員諸氏の職務上の負担も少なくないと思うが、いわば紀要は学部の顔である。そして、その創刊号を出すということは、まさに学部としての研究活動の継続的な発表を世に宣言したことになる。もとより公言したからには、常に遅滞なく、充実したものを世に問うよう努めなければならない。

古来「教うるは学ぶの半ばなり」（「書経」）といわれてきた。人に教えることは難しい。そのためには自らが十分に勉強しなければならない。教えることは半分は自分自身の学問修行であり、教える者には常に研究が必要である。その意味では、今日といえど

も、自己の研究に真摯に打ち込む教師の姿が、学生に刺激と緊張を与えない筈はない。大学教員の職務内容が時代とともに変遷せざるを得なくなったことの事情は認めないわけにはいかないが、大学においては、研究と教育が切り離すことのできないものであることは、いつの世も不変である。

本学社会学部の教員諸氏の研究の成果が、この論叢を通して広く江湖の声価を得ることを切望してやまない。